

「辺野古NO」続ける思い

日本の長年の懸案となっていた米軍普天間飛行場(沖縄県名護市)の移設先(辺野古)への移設計画は、移設阻止を掲げた市民グループ「知事が推進する移設計画に反対する市民連帯会」が、政府の強硬姿勢に苦しみながらも、市民らの抗議の盛り込みは先日、30日を過ぎた。現場を訪ね、改めて聞きた。なぜ、続けるのか。

座り込み抗議 3000日



新基地建設を断念する
3007日
米軍普天間飛行場の移設先(辺野古)への移設計画は、移設阻止を掲げた市民グループ「知事が推進する移設計画に反対する市民連帯会」が、政府の強硬姿勢に苦しみながらも、市民らの抗議の盛り込みは先日、30日を過ぎた。現場を訪ね、改めて聞きた。なぜ、続けるのか。



浜田陽一防衛相が就任後初めて辺野古入りした9月28日

も、通称ゲート前には座り込み人がいた。「新基地断念まで」「不屈」。そんな看板を掲げた赤嶺江さん(80)は、辺野古に話しかけると、「基地が生活の中にある。この辺りには生活の中にある。ゲート前は、辺野古の入り口。ここから米軍基地が出入りする。工事車両が出入りする。赤嶺さんら数十人が座り、「工事をおどろけ」と声を上げる。座り込みが始まったのは、政府が移設事業に着手した6月1日の2014年7月7日。工事があつた平日の日を中心に金曜日から数十人が集まる。節目も週末には数千規模の集まりも開かれ、知事選連選の先月22日の平日を数える。

癒えない傷 もうつくりたくない

の胸には、高校時代の記憶があった。17歳、米軍統治下から日本に復帰する年だった。学校がある沖縄本島中部は舞鶴が集中し、街には米兵たちがあふれていた。

いつも一緒に帰る友だちがいた。テスト期間中だったその日は先に帰った。午後9時を過ぎて寮に帰ってきた友だちは、真っ青な顔をしていて、服は破れ、いたるところに擦り傷があった。「外国人、腕を叩かれました」。部屋のカギを閉め、顔を洗った。突然腕をつかまれた。「お前はたの排水溝に頭を突っ込まれたぞ。たまたま人が通りかかると逃げ出せばいい。そこはいつも登下校に使う道だ」。

以降、友だちは毎晩泣きながら、事件「を口にする」とはもうなかった。赤嶺さんにも誰にも話さずじまいで済んだ。ただ、公にならないうちに米軍関係者による被害はその後も、少なからず耳に

8人の娘の手臂に返りついていた。1985年9月、米兵2人が少女に性的暴行を加える事件が起きた。被害少女は、2人と同年代。数万人が集まる大規模な抗議集会が開

沖縄の歴史 延長上に座っている

かされたが、足を運ぶたびに悔しかった。事件を直視するに自分が嫌われてしまふ気がした。自責の念が募った。できることがあったのではないかと。

「一生癒えない傷を抱えた女性に沖縄にはたくさんいる。基地の重みは心にも重み込んでいいる。もう昔して人を叩いた人なり。その痛みが、私をここに向かわせるんだ」。

「私たちが、沖縄の歴史の延長上に座っているんだ」。元教員の上間謙子さん(80)は、辺野古市にはそう語った。辺野古移設が押し進められ、20年ほど前から反対を訴えるた辺野古に通ってきたと

日本国憲法を適用されない米軍統治下。いまの知事である行政事務官選挙で選出された「主権公認」を米軍に認めさせたのも、住民が繰り返して声を上げたからだった。何より日本への復帰前、住民運動としては実現しなかった。そうした運動に「市民としてかわかってきた」断念に、自分たちの権利や民主主義を勝ち取ってきたとの思いがある。辺野古に通過一面を運んで来たが、服従を願ってからは体調が許さず身を引いた。おかげで「おれは私の最後の仕事をした」ということだ。

1985年の米兵による少女暴行事件の翌年、日本は、米軍普天間飛行場の全面返還に合意した。移設先となつた名護市辺野古の政府は2014年に移設先を決定した。防衛省による土地投入を開始した。今年8月米軍は、防衛省が土地投入を決定した。今年8月米軍は、防衛省が土地投入を決定した。